

# 空海さんと縁の深き 花の宮へ平岡八幡宮



三月の半ばも過ぎれば、春めいた日の陽気に誘われ出かけたくありません。

丹波国と京都をつなぐ街道のひとつ、周山街道。街道沿いの梅ヶ畑、北へ進めば高雄へ、この梅ヶ畑一帯の産土神がおわすのが梅ヶ畑八幡宮とも呼ばれ親しまれている、平岡八幡宮です。古来この一帯は薬草の産地であり、古墳もあるようで、はるか昔から人のいとながみ豊かな土地です。

太古からこの地を守る神、大地主大神は境内の地主社にいらっしやいます。氏子の方は本殿にお参りする前に必ずこの社にお参りされると聞きました。なので私もこのお社からご挨拶しています。

平安時代(八〇九年)、弘法大師

空海さんは高雄の神護寺に入られます。神護寺の守護神として、豊前国(大分県)の宇佐八幡宮から勧請し、自ら描いた「僧形八幡神像」をご神体として祀ったのが平岡八幡宮の始まり。山城国(京都)では最も古い八幡宮さまなのです。石清水八幡宮より古いということですね。

ですから昔は、この八幡さまのあたりまでもが神護寺の寺内であり、京からの入り口だったのでしょう。平安時代末期、一時は廃絶しましたが、神護寺を復興した文覚上人により再興され、室町時代には、火災により社殿を焼失しますが、將軍足利義満により再建されました。その後、江戸時代末期、仁孝天皇の命

により修復されたのが、現存する社殿なのだそうです。

社殿に向かう参道は、長く緩い登り坂。桜や椿、水仙が植えられた参道をしばし歩くと、開けた場所に手水舎が見えてくる。秋になると、三役相撲のご神事が執り行われるこの場所では、樹齢六百年を超え、とても貫緑のある椎木のご神木がご出迎えてくれます。

石段を上がれば拝殿があり、右手から社殿裏山側にやぶ椿の赤色が見えます。本殿脇の小さいお社に散る赤色が可愛らしくも美しいです。こちらのやぶ椿は室町期にはすでにここにあったようで、樹齢三百年を超える大きな古木を見ることが出来ます。このやぶ椿は珍種とされています。花が三角形に開き、しべが一般的な白ではなく、赤みを帯びているのです。ここにしかない、ここで見られない不思議な「平岡八幡やぶ椿」だそうです。

境内は、二百種三百本の椿であふれています。椿は古事記や日本書紀にも出てくる、いにしえより日本人には馴染みの花。秋から春までと



もうひとつ魅力的な椿があります。故事に「願い事をする」と白玉形の蕾が一夜にして開花し願いが成就した」と書かれる白玉椿伝説縁の美しい椿です。社務所のお庭にあるこの椿は、寒い間は霜除けの布が被せてあり、大事に大事に育てられている箱入り娘のようです。まだ寒い季に宮司さんが布の覆いを少し上げて見せてくださった時の笑顔が忘れられません。枝垂れにつく蕾は、まるで雪のよう。開けばその八重の花びらの白さは、気品と清らかさを兼ね備え、本当にべっぴんさん。その姿は絵馬にも描かれ、奉納されたたくさんさんの開花の椿絵馬が、多くの願い事の成就を示しています。

開花の時期は毎年まちまちですが、梅や椿、桜と花の天井画が重なった時に伺うことができれば、良き縁というものです。



見守る  
赤椿  
かなえ  
白椿

平岡八幡宮

ご本殿入り口、頭上の暮股のところに、艶やかな弁財天さまがいらっしやいます。この弁天さまが奏でているのは、琵琶ではなくお琴。花々を愛で、とても珍しい琴弾弁財天さまにお目にかかって、なんとも華々しい気持ちに……。また帰りは、宮司さんがお漬けになった梅と結び昆布の入った大福茶がいただけうれしい限りです。

ゆつくりとお茶をいただいたり、椿の小路を散策したりと、帰りのバスを待つ人たちも時間までゆつくりとくつろげる境内の雰囲気が好きです。

〈こばやし ゆきえ〉  
京都・下鴨生まれ。大学で日本画を学び、卒業後は本、雑誌、広告、新聞、TVCMなど幅広く絵に関わる仕事に携わる。著書に「京都でのんびり私の好きな散歩みち」、「京都をてくてく私が気ままに歩くみち」、「京都のいちねんわたしの春夏秋冬」がある。



ご祭神の応神天皇は勝ち運や出世の神として崇められています。私にとつては、華やいだ優しい気配が境内に満ちるお宮。氏子さんをはじめ花好きな人々の憩うこんな優しいことを、空海さんも喜ばれているのではないのでしょうか。

花三昧で暮れる春は素敵です。